資料４

次期「基本計画」（叩き台）

～第６次　神戸市基本計画～

神　戸　市

（目次・構成）

１　次期基本計画の策定にあたって

２　神戸市基本構想

神戸らしさと未来への方向性

３　神戸のこれまでと今

（１）神戸の経済発展

①開港とともに発展したまち　②時代の変化に伴う産業の転換

（２）神戸の人口推移

①これまでの人口推移　②神戸の人口動態の特徴

③今後の人口見通し

（３）神戸の都市開発

①これまでのまちづくり　②現在の状況

（４）幾多の災害を乗り越えてきたまち

①災害の歴史　②市民の誇り

（５）これまでの取り組みにより見込まれるまちの変化

①神戸空港の国際化　②都心三宮・WF の再開発

③駅周辺のリノベーション　④森林・里山の再生

４　基本構想を実現するための方向性　⇒市民と議論して作成

基本姿勢 未来を見据えた都市の持続可能性を最重視します

方向性① 世界と繋がる２つの港　「新たな時代の国際都市」へ

方向性② 個性豊かで多様な地域の融合「日常と非日常が交わり続ける都市」へ

方向性③ ともに乗り越え育んだ絆「いつまでも幸せを感じ、分かち合える都市」へ

５　目標値（KGI）（案）

６　10 年後の神戸の都市像（仮）　⇒市民と議論して作成

１　次期基本計画の策定にあたって

神戸市の総合基本計画である「新・神戸市基本構想（1993 年策定）」、「第５次神戸市基本計画（2011 年策定）」及び「神戸 2025 ビジョン（2021 年策定）」は、いずれも 2026 年３月に計画終期を迎えます。

全国的に人口減少や少子・高齢化が進む中、未来にわたって持続可能なまちづくりを進めていくためには、市民と行政が目指すべき神戸の姿や方向性を明確化し、長期的な視点をもって、ともに運営していくことが求められます。

そのため、本市においては、新たな総合基本計画の策定を、市民の市政参画への機運醸成と、行政内部で共通の価値観を持ち、部局が連携を図りながら一貫性のある施策を展開していく契機として活用することとしました。

新たな基本構想の策定にあたっては、多くの市民から、「これから神戸が大切にし、未来に紡いでいくべきこと」について様々なご意見を頂きながら、審議会において議論を積み上げ、いつの時代でも変わることのない神戸の“基本理念”として取りまとめました。

基本構想の下位となる新たな基本計画については、神戸のこれまでの歴史や現状、多様化・複雑化する社会課題を踏まえながら、基本構想の実現に向けた方向性と、その先にある 2035 年の神戸の姿について、多くの市民や関係者とともに議論を行い、今後の 10 年間の指針として策定しました。

２　神戸市基本構想

神戸は、海と山に囲まれた
美しいみなとまちです
開港以来、海外との交流を重ね
文化や流行を日本に生みだしてきました

神戸は、多彩な表情を見せるまちです
都会と里山の共存
洗練されたまち並みと下町の活気
まちに溶け込む坂道も
毎日違う風景を見せてくれます

神戸は、人間らしい
あたたかみのあるまちです
ともに困難を乗り越えていく絆
多様性があふれる開かれた気風
いつでも神戸は
すべてのひとをやさしく包み込みます

これまで神戸には多くのものが
受け継がれてきました
これからも神戸は
世代や立場を超えた繋がりの中で
広く内外に貢献し
未来に向けて進んでいきます

培ってきた技術と知の集積により
時代を彩る産業とひとが育つまちへ
世界を臨む海や空からひとが集い
新たな価値の創造を実現するまちへ

誰もがひとに寄り添い、助け合いながら
それぞれの夢に挑戦できるまちへ
豊かな自然とひとの営みが織りなす
一人ひとりが幸せを感じられるまちへ

神戸は、いつまでもまちの誇りを育み
次代に紡いでいきます

神戸市基本構想の前段には、神戸の歴史や都市のなりたちに触れながら、**「海と山に囲まれた美しいみなとまち」**、**「多彩な表情を見せるまち」**、**「人間らしいあたたかみのあるまち」**という３つの神戸らしさが描かれています。

神戸は大都市でありながら海と山といった自然に恵まれ、古くから「進取の気風」に富む、国際色豊かな港町として発展し、新たな流行や文化を生み出してきました。人の手が入り続けることによって緑滴る山になった六甲山、茅葺民家が点在する里山、古来からの景勝地、須磨や垂水の海岸、外国風の建物が残るまち並みや、多くの人で賑わう市場、風情あふれる下町、身近にある坂道からの眺望も、先人たちが守り育ててきたものです。また、神戸は、戦災や水害、震災など多くの試練に直面する度に、まちを愛する人たちが、国籍や人種を超え、それぞれを尊重しながら支え合い、乗り越えてきました。この絆があるからこそ、神戸には多様な主体が互いに認め合い、助け合う優しさを感じることができます。

中段には、先人たちが育み、受け継がれてきたこれらの神戸らしさを、これからも守り、活かし、高めながら、世代や立場を超えたつながりの中で広く内外に貢献し続けていくことが謳われています。

そして、後段には、多くの市民の方々からいただいたご意見・メッセージが凝縮され、未来に向けて神戸のありたい姿として描かれています。**「時代を彩る産業とひとが育つまち」**、**「新たな価値の創造を実現するまち」**、**「それぞれの夢に挑戦できるまち」**、**「一人ひとりが幸せを感じられるまち」**。これらは、いずれも先人から受け継いだ神戸らしさを活かし、さらなる歩みを進めるにあたっての指針です。市民の皆様とともに作り上げた神戸のありたい姿を追い求めていくことで、まちを愛する心が生まれ、まちの誇りが育まれます。

神戸市基本構想には、このような、いつまでも、神戸らしさを磨き、まちの誇りを育み、次代に紡いでいきたいという市民の想いが込められています。

３　神戸のこれまでと今

（１）神戸の経済発展

① 開港とともに発展したまち

神戸は、1868 年の開港をきっかけに、外国人の居住や商売が認められた居留地が設けられ、西洋風でお洒落な建築物が次々と建てられました。欧米の商社が進出し、綿花や鉄などの輸入、茶や生糸の輸出が活発となることで、日本屈指の貿易港として急成長しました。開港当初は、軽工業が中心だった貿易は、明治政府の政策のもとで重工業化が進められ、国全体の産業の近代化と重なり、造船業や製鉄業、電気機械などの重厚長大型の産業が神戸経済を大きく発展させ、神戸には優秀な人材と優れた技術力が集まりました。

明治 30 年代後半から 40 年代にかけて、西洋文化の流入とともにパンや洋菓子等の需要が高まると、西洋からパン職人の技術や製菓技術が持ち込まれ、多くのパン屋や洋菓子店が立ち並びました。また、居留地周辺では、洋服や靴の製造が盛んになり、「神戸洋服」「神戸靴」といったブランドが確立されるとともに、真珠加工やケミカルシューズなどの産業も発展し、神戸は国内でもファッションの中心地として知られるようになりました。ジャズやゴルフ等のスポーツも神戸を通じて国内に広がり、港町の神戸が持つ独特の開放的な空気は、さまざまな異文化を自然に取り込み、国内に新しいカルチャーを生み出す土壌となりました。

また、日本に訪れる外国人が増加したことで、居留地以外の北野エリアや塩屋にも異人館が建てられ、外国人が共生する街が生まれ、異国情緒あふれるハイカラでモダンな街として発展してきました。戦後の復興期には、長田区に鉄工業や靴製造業の町工場が軒を連ね、人情味あふれる下町が形成され、商店街も活気に満ち、地元の人々が集う場となりました。

現在では、市内に国際学校、多様な宗教施設、外国人クラブ、世界各国の料理が楽しめるレストランなど、グローバルな人材が安心して暮らせる生活環境が整い、世界的に有名な外資系企業が日本法人拠点を設置するなど、グローバルな人材が活躍し、また、グローバルな感性を磨いた人材が羽ばたくまちとなっています。

このように、神戸は開港をきっかけに、多くの外国人が移り住み、常に海外からの多様な文化や新しい気風を取り入れながら、国際都市・神戸として個性豊かな発展を遂げ、日本の経済や文化の成長を支えてきました。

② 時代の変化に伴う産業の転換

神戸の産業構造は、二度にわたるオイルショックや、海外の造船・鉄鋼業の台頭を踏まえ、開港以来、築いてきた重厚長大型産業への偏重を脱し、時代の変化とともに転換を遂げてきました。ホテル・アパレル・真珠等のファッション産業や、異国情緒あふれる街並みや豊かな自然を活かしたコンベンション産業の推進に取り組み、ポートアイランドの完成を記念して開催された「ポートピア‘81」では、1600万人もの集客を達成しました。また、既存産業の高度化や多角化を図るため、電子機器や精密工業をはじめ、震災以降、医療・バイオ産業の誘致を進めるとともに、さらなる経済活性化と競争力強化に向け、飛躍的な成長が期待されるスタートアップへの投資をはじめ、成長企業や優秀な人材の誘致にも力を入れてきました。

その結果、京都、大阪の経済圏と隣接しながらも、神戸単独で地域経済循環率は100%超を維持し、独自の経済圏を形成してきました。今後、東京一極集中が進む中においても、神戸の経済圏を引き続き維持・成長させていくとともに、伝統産業・観光を中心とする京都や、ビジネス・金融を中心とする大阪と連携を図り、経済的シナジーを生み出すことで、関西を東京と並ぶ経済圏へと成長させていく一翼を担っていく視点も重要です。

（２）神戸の人口推移

① これまでの人口推移

第二次世界大戦後、日本は復興とともに第一次ベビーブームを迎え、出生率の急上昇とともに人口が増加しました。さらに、1960 年代から高度経済成長期を迎え、地方から都市部への人口集中が活発化し、本市でも 1992 年には人口が 150 万人に到達しました。1995 年の阪神・淡路大震災では、戦後初の人口減をもたらし、一時は人口が 142 万人まで減少しましたが、震災の復興が進むにつれ、人口は回復し、2004 年には震災前の人口を超えました。

しかしながら、日本全体で、女性の社会進出等に伴う晩婚化や未婚化、医療技術の発達による寿命の延伸により、少子高齢化が進展し、2008 年の 1 億 2,808 万人をピークに人口減少が始まり、本市においても同様の傾向によって 2011 年の 154 万人をピークに人口減少が続いています。

② 神戸の人口動態の特徴

市内には高等教育機関が充実しており、全国各地から学生が集まることから、18 歳から 23 歳の若年層においては転入超過の傾向がみられます。特に、県内の他都市や近畿圏内からの転入が多く、神戸市の学術・研究環境の充実が影響していることが要因と考えられます。しかしながら、就職期を迎える 23 歳以降では転出超過の傾向が顕著で、特に東京圏への人口流出が大きく、これらが市内の労働力人口の減少にもつながっており、地域経済への影響が懸念されています。一方で、40 代～60 代の中高年層では転入超過が見られます。神戸市の都市機能や交通アクセスの良さ等を求めて、西日本や兵庫県西部からの転入者が多く、特に、西区や垂水区では周辺都市からの転入者が多い傾向にあります。

③ 今後の人口見通し

2024 年の日本の出生数は約 72 万人と、９年連続で過去最少が続いており、近い将来、東京圏でも人口が減少に転じ、日本全体で人口減少がさらに加速していくことが見込まれ、経済やくらしに大きな影響を及ぼすことが予想されます。

2024 年時点で約 7,000 万人だった労働力人口は、2050 年には 6,300 万人程度まで減少すると予測されており、企業の生産性低下や経済成長の鈍化が懸念されます。特に介護分野では 2050 年に 120 万人を超える介護人材不足が見込まれています。

これらに対応するためには、AI、自動化技術の導入など、新たなテクノロジーの活用も含めて、持続可能性の視点が重要です。

（３）神戸の都市開発

① これまでのまちづくり

神戸市の都市の発展は鉄道の敷設とともに進んできました。神戸は、六甲山系が聳える地形特性から、明治・大正時代に平坦な海側に鉄道が敷かれ、沿線を中心に都市が発展してきました。戦後、日本全体では都市部への人口流入が加速し、神戸市も例外ではありませんでした。特に高度経済成長期には、工業化の進展とともに人口が急増し、住宅地の拡大が求められました。しかし、神戸市は海と山に挟まれた地形のため、平地の面積が限られており、六甲山の山麓部にまで開発が進むこととなりました。この結果、無秩序な開発が進み、環境破壊や土砂災害のリスクが高まるなどの問題が発生し、人口の受け皿確保が喫緊の課題となりました。こうした状況を受け、六甲山系北側に大規模ニュータウンを開発するため、交通インフラの整備が進められました。市営地下鉄の開通や神戸電鉄の延伸により、郊外から都心へのアクセスが向上し、居住環境が大きく改善され、西神や北区の沿線にも人口が広がってきました。当時、山を切り開き、その土砂を用いて臨海部を埋め立て、広大な宅地と産業団地を確保してきた神戸方式の開発手法が、「山、海へ行く」と言われる神戸特有のまちづくりです。

② 現在の状況

現在、全国的な人口減少に伴い、ニュータウンのオールドタウン化や、空き家・空き地の増加等による都市のスポンジ化が全国共通の課題となっています。神戸市では、これまで計画的に開発されたニュータウンにおいて、広い道路や公園が整備され、住みやすい環境を提供してきましたが、開発から一定年数が経過し、住民の高齢化や若年層の流出、住宅や公共施設の老朽化が顕著になっています。また、六甲山の山麓部では、過去の乱開発された住宅が空き家となって放置され、景観や環境面での悪影響が懸念されています。さらに、ポートアイランドや六甲アイランドにおいても、オフィスや商業施設の空室率が上昇し、都市機能の維持が課題となっています。これらは、過去の都市開発や地理的背景と密接に関係しており、神戸特有の様相を見せています。

（４）幾多の災害を乗り越えてきたまち

① 災害の歴史

神戸市は六甲山系の急峻な地形と瀬戸内海に面した立地のため、過去に何度も水害に見舞われてきました。特に 1938 年の阪神大水害では、集中豪雨により河川が氾濫し、市街地が壊滅的な被害を受けました。この災害を契機に、六甲山系の砂防工事が進められ、現在では 500 基以上の砂防ダムが整備されています。

第二次世界大戦中、神戸市は空襲による甚大な被害を受けました。特に、1945 年の神戸大空襲では、市街地の約６割が焼失し、人口は約 38 万人まで減少しました。しかし、戦後の復興計画により、都市の再建が進められ、神戸は再び国際貿易都市としての地位を確立しました。

1995 年の阪神・淡路大震災は、日本で初めての近代的な大都市における直下型地震であり、神戸に未曾有の被害をもたらしました。人口は震災前の約 152 万人から約 142 万人に減少し、復興に向けて厳しい財政運営を余儀なくされました。しかしながら、震災後の救援活動には、震災後５か月を経過した時点で延べ 122 万人以上ものボランティアが全国各地はもとより世界各地から駆け付け、災害ボランティアは社会現象となり、平成 7 年は「ボランティア元年」とも呼ばれました。大幅な行財政改革に取り組むことで、財政危機からの脱却を図り、2004 年には人口が震災前の水準を上回りました。また、特に被害の大きかった地域で行われた土地区画整理や再開発事業も、2024 年 11 月に新長田南地区が完了し、すべての復興事業が終了しました。このように、神戸は様々な災害に見舞われながらも、そのたびに復興への強い意志を示し、市民が団結することで、再生を果たしてきました。

② 市民の誇り

神戸は、古くから「進取の気風」に富む、国際色豊かな港町として発展してきました。かつてはげ山だった六甲山は、多くの人々の長年にわたる植林によって、見事に再生し、現在は、災害から市民生活を守り、多くの人々に親しまれ、神戸を象徴する憩いの空間を創出しています。また、これまで戦災や水害、震災など多くの試練に直面するたびに、ともに手を携え、苦難を乗り越えてきました。このように、市民が手を取り合って、新たなことに挑戦し、様々な困難を乗り越えてきた経験こそが、神戸市民のまちを愛する気持ちの根幹であり、市民の誇りです。

震災 20 年を機に、市民によって生まれたシビックプライド・メッセージ「BE KOBE」は、まさにその象徴であり、神戸市民であることを誇りに思う気持ちや、神戸の魅力は人であるという思いが込められています。

（５）これまでの取り組みにより見込まれるまちの変化

① 神戸空港の国際化

2025 年 4 月には、国際チャーター便の運用開始や国内便の発着枠が拡大され、2030 年頃には、国際定期便の運用が開始されています。国際定期航路を持つ神戸港に加え、神戸空港が国際空港となる「第２の開港」により、観光やビジネスで海外から多くの人々が神戸に訪れるとともに、神戸から人材や情報のパイプが世界とつながることになります。

② 都心三宮・ウォーターフロントの再開発

神戸は戦前から鉄道沿線や駅を中心に都市開発が進められてきました。しかしながら、震災以降、復旧・復興が最優先となり、都市開発によるまちの魅力向上は手付かずの状態が続きました。震災から 20 年が経過し、復興にも一定の目途が立ち、また、絶え間ない行財政改革によって政令市上位の財政力まで回復したことをきっかけに、駅前を便利で快適な空間にしていくため、都心・三宮再整備が始まりました。2021 年 4 月の神戸三宮阪急ビル開業を皮切りに、2022 年 7 月には新中央区総合庁舎、2023 年４月には東遊園地がリニューアルオープンしました。また、JR 三ノ宮駅新駅ビルや雲井通 5 丁目地区の新バスターミナルビル、三宮クロススクエア、市役所２号館などの整備も着実に進んでおり、2030 年頃までに三宮は劇的な変化を遂げます。さらに、ウォーターフロントでは、2021 年 10 月に神戸ポートミュージアムが開業して以降、2024 年春に神戸ポートタワーのリニューアルが完了し、2025 年４月にはジーライオン神戸アリーナが開業しました。今後、新港突堤西地区でのマリーナ整備、京橋船溜まりの埋立による回遊性向上、中突堤周辺エリアの再整備が進み、見違える姿を現す予定です。

③ 駅周辺のリノベーション

郊外では、戦前から先人たちが築き上げてきた鉄道網などの既存インフラを有効活用し、まちの佇まいや雰囲気を印象づける「まちの顔」となる駅や駅前空間のリノベーションに取り組んできました。「名谷駅」「西神中央駅」「垂水駅」をはじめ、エリアの拠点となる駅を中心に、駅前広場のリニューアルやライトアップ、憩いの空間の創出に取り組んでおり、区役所や図書館など公共施設の再配置や商業施設のリニューアル、子育て・文化環境の充実、職住近接の取り組みなど、まちや暮らしの質を高める取り組みを進めています。今後も市内各所でのリノベーションが計画されており、民間投資の誘発と相まって、次々と新たな「まちの顔」が生まれていく予定です。

④ 森林・里山の再生

神戸は、三宮から直径５㎞ 圏内に、雄大な六甲山系があり、美しい里山や田園風景が広がっています。中世時代は燃料材や肥料を確保するために、六甲山の森林伐採が繰り返され、江戸時代にはげ山となった結果、土砂災害を頻発させてきました。その後、市民の手によって植林が行われ、今では木々が生い茂り、豊かな山に再生しました。しかし、短期間に一斉に植林されたため、樹種や樹齢が偏っており、十分な世代交代ができておらず、また、生活様式の変化や、担い手不足、自然環境の管理不全等から、一部で荒廃が進むエリアも見られます。神戸の森林・里山を美しく健全な状態で次世代にも引き継いでいくため、現在、森林を適切に伐採し、伐採により発生する木材の活用までを一つのサイクルとして捉え、森林整備、木材の流通・加工や活用などに関わる様々な主体と繋がる「こうべ森と木のプラットフォーム」を立ち上げ、木材の需給のマッチング、神戸市産材の普及、森林所有者への支援、人材育成などに取り組んでおり、森林整備と木材活用の資源循環の仕組みが構築される予定です。

４　基本構想を実現するための方向性　⇒以下の内容を市民と議論して作成

今後、人口減少や東京一極集中をはじめ、神戸を取り巻く様々な課題に直面する中、先人たちが築いてきた「神戸らしさ」を守り育てながら、いつまでもまちの誇りを未来へ引き継いでいきます。その実現に向けた、今後 10 年間の「基本姿勢」と「３つの方向性」を以下の通り、取りまとめました。

【基本姿勢】　未来を見据えた都市の持続可能性を最重視します

今後 10 年間、神戸だけでなく、東京をはじめ全国の都市で人口が減少し、さらに加速していくことが見込まれます。この時代の流れを冷静に捉え、短期的効果ではなく、長期的な視点に立ち、持続可能な都市を実現することで、まちの誇りを育み、次代に引き継いでいくことを基本姿勢とします。

方向性①　世界と繋がる２つの港　「新たな時代の国際都市」へ

神戸は、古くから外国との交流によって、多様な文化や気風を取り入れることで、まちを発展させてきました。空港の国際化によって、神戸は、さらに世界に開かれたまちになります。国内外から多様な人材や技術、文化を取り入れ、神戸の強みと融合を図ることで、人やまち、しごとの魅力を大きく成長させ、いつまでも**「海と山に囲まれた美しいみなとまち」**を守り育てていきます。

国内外から集まる多様な人材や企業と、市内の大学や企業、行政等が組織を超えてつながり、イノベーションを創出することで、独立した経済圏を支える「ものづくり」、「港湾」、「観光」、「医療・バイオ」等の既存産業の発展、新たな成長産業の創出を加速させ、東京一極集中が進む中においても、関西圏ひいては日本全体の経済成長をリードしていきます。

また、海と山が織りなす美しい風景や都心・ウォーターフロント再開発との相乗効果を活かした魅力発信を強化することで、これまで培ってきたグローバル人材の受入機能や輩出機能を強化し、グローバル市場における神戸の存在感を高めていきます。

方向性②　個性豊かで多様な地域の融合　「日常と非日常が交わり続ける都市」へ

神戸の地理的特性や歴史の中で形作られた個性豊かなまちなみや、豊かな自然は、神戸ならではの魅力です。今後、全国的に人口減少が進む中でも、先人たちがこれまでの歴史の中で築いてきた貴重な財産を最大限に活かし、磨いていくことで、将来世代が充実したライフスタイルを送れるよう、いつまでも**「多彩な表情を見せるまち」**を守り育てていきます。

三宮など都心の中心部では居住機能を一定抑制しながら、商業・業務機能を集め、国内外から多くの人が集まり、買い物やアート、食事など非日常の体験や、魅力的なビジネス環境を提供する場を目指していきます。

また、既成市街地やニュータウンでは、まちの顔である駅を中心に、生活利便施設のリニューアルや、職住近接の取り組みなどにより、暮らしの質を高めます。さらに、六甲山等の森林や、農村・里山地域の豊かな自然を守りながら、郊外とニュータウンの交流を進め、郊外のライフスタイルをより魅力的なものにするとともに、多彩なまちなみをつなぐ公共交通網を維持することで、市民の満足度を高め、ひいては内外の人や社会から選ばれる都市を目指します。

方向性③　ともに乗り越え育んだ絆　「いつまでも幸せを感じ、分かち合える都市」へ

これまでの歴史によって培われた進取の気風や、ともに災害を乗り越えてきた絆は、神戸のまちと人に受け継がれてきました。今後、先行きが不透明な変化の激しい時代においても、誰もが寄り添って助け合い、そして、新たな挑戦を続けていくことで、いつまでも**「人間らしいあたたかみのあるまち」**を守り育てていきます。

神戸の未来を担う子どもたちをはじめ、性別、年齢、障害の有無、民族、国籍に関わらず多様な主体や団体が、地域の中でつながり、支え合いながら、誰もが安心して、それぞれの夢に向かって自由に挑戦できるまちを目指していきます。

また、子育て・教育環境の充実や、健康・福祉の増進、安全なすまい・住環境の提供などにより、誰もが安心して暮らせる環境をつくるとともに、新たなテクノロジーや技術を積極的に取り入れながら、次代をリードする防災力の強化や地球環境に貢献する質の高いくらしを実現させます。さらに、それらの取り組みを世界に発信することで、震災で頂いた多くの支援に、いつまでも感謝の気持ちを忘れることなく、内外に貢献していくまちを目指します。

５　目標値（KGI）（案）

上記の方向性について、今後の 10 年間での達成度を評価するため、以下の目標値（KGI）を設定します。

方向性①　世界と繋がる２つの港　「新たな時代の国際都市」へ

新たな時代の国際都市として、神戸の経済圏を維持・成長させていくことにより、**2025 年以降の地域経済循環率について、100%以上を維持**する。

（参考）他都市の地域経済循環率※

横浜市：80.7%、川崎市：85.1%、明石市：92.6%、芦屋市：55.7%、西宮市：73.1%
大阪市：142.5%、福岡市：105.8%

※市内総生産÷市民総所得

出典：RESAS 地域経済分析システム　https://resas.go.jp/region-cycle-diagram/

方向性②　個性豊かで多様な地域の融合　「日常と非日常が交わり続ける都市」へ

市民一人ひとりが幸せを実感できるまちを目指すことにより、**2025 年以降の人口の社会動態について、プラスを維持**する。

方向性③　ともに乗り越え育んだ絆　「いつまでも幸せを感じ、分かち合える都市」へ

これからも神戸を愛し、誇りを持ち続けるまちを目指すことで、**地域幸福度（Well-Being）指標※における「客観指標」の値を相対的に上昇させる。**

※地域幸福度（Well-Being）指標

国が進めているデジタル田園都市国家構想では、「心豊かな暮らし」（Well-being）と「持続可能な環境・社会・経済」（Sustainability）の実現に向け、地域幸福度（Well-Being）指標の活用が推奨されています。

この指標は、市民の「暮らしやすさ」と「幸福感（Well-being）」を数値化・可視化したもので、市民アンケートによる主観指標と、オープンデータによる客観指標で構成されています。

６　10 年後の神戸の都市像（仮）　⇒以下の内容を市民と議論して作成

この基本計画の目標期間のゴールとなる 10 年後（2035 年）の神戸は、こんなまちになっているはずです。ここには、多くの市民から頂いた、10 年後の神戸のありたい姿に対する沢山の想いがあふれています。

○10 年後の神戸

自然も都会も、歴史も未来も、仕事も余暇も、安らぎも挑戦も・・・
～すべての望みに手が届くまち・神戸～

神戸空港や神戸港は、世界とつながる玄関口。そこには、絶えず人とモノが集まり、多様な文化と活気が行き交う。

都心には、おしゃれで心地よい雰囲気と、温かなもてなしの心が広がる。周辺には便利で快適な交通網が整い、新たな人々が次々と訪れ、活発な交流が生まれることで、まちの魅力はさらに増していく。

郊外へ足を伸ばせば、魅力的な駅を中心に、それぞれの理想のライフスタイルが形となり、ゆとりと上質なくらしが広がる。

山から望めば、先人から受け継いだ自然豊かな農村や里山、古くからの景勝地が悠然と広がり、夜には世界に誇れる美しい夜景が街を幻想的に彩る。海に向かえば、港町の歴史と文化を感じながら、ジャズの音色に身をゆだね、贅沢な時間に包まれる。

ビジネスシーンでは、最先端のアイデアと熱意が交差し、新たな価値が次々と芽吹き、未来を切り拓く力がみなぎる。

街のいたるところで、異なる世代や多様な人々が集い、支え合い、こどもの笑顔と人の温もりがまちに安らぎをもたらす。

人々の暮らしは、たくましく築かれたまちの礎によって守られ、それぞれの環境を思いやる行動が、次世代の安心を生み出す。

そして、まちの誇りが、人々に根付く神戸を愛する心によって育まれ、次代に紡がれていく。

神戸市は、このような、海と山に象徴される自然環境や歴史とともにあり続け、人を大切にする都市として、また、震災で頂いた内外からの支援に、感謝の気持ちを忘れることなく、世代や立場を超えた繋がりの中で広く内外に貢献し、いつまでもまちの誇りを育みながら、次代に紡いでいく都市の実現を目指します。